

三笠地域 現地審査報告書

審査員：伊藤 和明・廣瀬 亘 審査補助員：日比野 剛

期間：平成 25 年 7 月 8～9 日

主な参加者（所属）

小林 和男（三笠町長・三笠ジオパーク協議会長）西城賢策（三笠副町長）北山一幸（三笠市教育長）小田弘幸（三笠市企画経済部企画振興課長）阿部文靖（同・企画振興課主幹）新居忠浩（同・企画経済部政策推進係長）栗原憲一（市立博物館学芸員）加納学（同・学芸員）高橋史弥（同・学芸員）星野直義（三笠振興株式会社代表取締役）解良守（アドバイザー）嶋田喜四郎・松田敏昭・高橋キクエ・山崎太地・小山内年昭・遠藤佳子（ジオガイド）

見学地点

三笠市立博物館および野外博物館、奔別炭鉱縦坑、達布展望台、山崎ワイナリー、イオンスーパーセンターPRブース、桂沢ダム、原石山大露頭、トロッコ列車～鉄道記念館、幌内炭鉱跡地、市来知神社等市街地エリア

現地審査のまとめ

1) ジオパークの名称とテーマ

ジオパークのエリアは三笠市の範囲と一致する。「三笠」という名は化石や炭鉱と結びついて国内外に広く知られており、このジオパークを現す名称として適切である。メインテーマは「大地と文明の共生」であり、三笠地域のジオの特色を良く表してはいるもののやや抽象的であり、ジオパークで何を見て欲しいのかを意識した具体的なサブテーマが必要だろう。

2) ジオサイトと保全

アンモナイト等の化石、石炭、かつての海が次第に浅くなり陸化する過程、そして衝突帯としての北海道を体感できるサイトが多数ある。地質、地形、歴史、産業、文化、交通とジオサイトは多様であり、そのいずれもが化石・炭鉱という三笠地域の特色と強く関連している。明確なストーリーに沿って整備されたジオトレイル、大学等の専門的な巡検から一般客まで広い層にわたって活用できる良質なジオサイトが存在し、各サイトのテーマも明瞭である。

アンモナイト等の化石類が多産し、一部は世界的に見ても高い学術的価値を有する。ジオツアーでは化石は現地での観察のみ、貴重な化石は市立博物館に寄贈し学術研究の対象とする等、化石を地域の共有財産として扱うことがジオパーク運営者により明確にされている。また、化石産地の荒廃が進まないよう地図に産地を明記しない等の配慮も成されている。

日本国内で急速に失われつつある炭鉱遺構が多く残されていることも特徴である。炭鉱遺構はその多くが手を加えずにその場に残されているが、専門家により遺構の価値や現況の評価が行われ、最低限の保全作業など保存に向けた取り組みが着手されている。積雪地で遺構の破損が進みやすく継続的な対策が望まれる。ジオパークでの活用可能性も考慮した議論も進められており、ジオと炭鉱・石炭を明確にリンクさせたストーリーづくりが今後望まれる。

3) 教育・研究活動

博物館を中心に大学や郷土史研究者など各分野の研究者が広く連携し、特に化石に関する研究は世界的に見ても高水準である。研究成果は学校教育や生涯教育を通じて地域社会への普及が図られ、地域住民の誇り醸成に繋がっている。地元の学校教育ではジオパークに関する授業がカリキュラムに取り入れられ、副読本など教材作成にもジオパークスタッフが深く関与している。今後、一般向けのガイドブック作成などジオパークを訪れる人々も意識した教材開発が望まれる。

4)管理組織・運営体制

ジオパークの運営主体である協議会は三笠市が事務局となり、市内の観光・教育関係団体、国や北海道の出先機関など構成各機関の良好な協力関係が保たれている。市の総合計画でジオパークが明記されていることは特筆に値し、人的・資金的な面において市の強力なサポートのもとジオパーク関連事業が展開されている。三笠市企画経済部がジオパーク活動の総合的運営や関係機関との調整、博物館が教育・研究活動と、明確な役割分担と連携のもと事務局が運営されている。一方、協議会の職員は他業務との兼務状態にあり、ジオパーク専任の組織を設けるなどさらなる機能強化が望まれる。また、ジオパーク活動を持続させていくため、住民参加をさらに促すこと、ジオパーク協議会としての自主財源を確保することも必要であろう。

5)地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

ジオツアーはH24年度に8回行われ、H25年度も活発に実施されている。協議会でジオガイド養成講座を開講し市内外から住民が参加、すでに10名のジオガイドが誕生している。現時点ではボランティアガイドであり、ガイド技量の個人差も大きい。ジオガイド養成講座に比べ、ジオガイドの組織化や公認ガイド制度の設置、他のジオパークとのガイド交流などについても検討が必要である。

拠点施設としては市立博物館がある。ジオパーク・ジオツアーに関するほぼ全ての情報が得られ、学芸員が常駐しさまざまなレベルの客に対応可能、雨天時の代替プログラムの提供の場ともなっている等、その質は高い。鉄道記念館は炭鉱と鉄道に関する展示が充実し、トロッコ列車は炭鉱とともに生きた街の歴史を楽しみながら体感できるが、ジオとの関連を意識した見せ方が工夫されればさらにより施設となりうる。市内外の自治体や観光・交通拠点施設ではポスターやパンフレットなどジオパークの情報媒体が多く設置されている。今後は道の駅や観光関係施設などをサテライト施設としても機能させることが望まれる。ジオパークエリアであることを示す表示およびコアサイト・サテライト・主要ジオサイトへの案内表示等はまだまだ十分とはいえず、今後積極的な整備が望まれる。Webサイトは良好なものが解説され、更新も頻繁に行われている。SNSの併用によりさらなる情報発信効果が得られるだろう。

解説看板は、日本ジオパークネットワークが開催した研修会の議論を踏まえて保守の手間軽減と更新の容易さが意識されている。地形・地質系ジオサイトでは一部にやや専門的な用語も散見されるものの、おおよそ小学校高学年～中学生を対象としたわかりやすいものになっている。一方、炭鉱遺構や文化・歴史系のジオサイトでは、ジオパーク以前に設置された看板が多く残されており、ジオパークのストーリーを意識したものへ計画的に更新がはかられる必要がある。

ジオ関連商品は、ワインなど地元の地形や地質・気候の特徴を生かした優れた商品が民間により独自に開発されはじめている。今後、ジオパーク運営者が自治体・民間等に働きかけ、さらなる商品開発を促すことが望まれる。

6)国際対応

案内看板ではタイトルに日本語に英語、韓国語、中国語が表記されている。著名な観光地ではなく外国人客はまだ多くはないが、外国人客のニーズ多様化に対応するため、今後、中国語・韓国語などアジア圏など外国語に対応できるインフォメーション施設、ジオガイド、パンフレット等の整備を進めていく必要がある。

7)防災・安全

トレイルには落石防護柵が設置され、雪解け時や降雨時など高リスク時にはトレイルが閉鎖されること、急傾地でのジオツアーではヘルメット着用が義務づけられるなど、防災・安全に関する対応は良好である。この地域においてジオパーク来訪者が被災する可能性がある自然災害は水害・地震等であり、コア施設やサテライトにハザードマップを設置する等の対応をすとなおよい。